

県北

ローカル線 県北の顔に

三次で研究者らシンポ

県北のローカル線の今後を考えるシンポジウムが2日夜、三次市十日市南であった。乗客が減少しているJR芸備線や福塩線、三江線の利用者増や地域活性化に向けた取り組みについて、研究者や沿線住民たちが議論した。約70人が耳を傾けた。(馬上稔子)



ローカル線の魅力を語る
阪口准教授(右端)たち

利用増へ活性化議論

シンポジウムは2部。地域の魅力を紹介。阪もある」と指摘した。構成。1部では、県立「地元では「秘境駅へ行こう!」広島大の阪口利文准教授「気にとめられていない」などの著者で会社員の授たち5人が駅や沿線が、愛好家に人気の駅 牛山隆信さん(三次市)

は、米子空港など県外の空港からのアクセスにも注目し、首都圏や海外の観光客を呼び込む取り組みを提案した。

2部では、利用増に向けた活性化策を議論。JR西日本広島支社の真辺浩治企画副課長は、約20年前に比べて芸備線の乗客は約6割減っていると説明し、「JR、住民、行政の連携と工夫が不可欠」と強調した。観光列車の運行などの提案も出た。

シンポジウムは、三次市と県立広島大による協働プロジェクト事業の一環で開いた。